視線恐怖傾向と視線量との関連

—使用言語の比較から—

○若岡里奈¹・伊藤宗親²

(¹ 希望が丘子ども医療福祉センター・² 岐阜大学教育学部)

キーワード: 視線恐怖, 第二言語, ディストラクション

The Relation between Fear of Eye-to-Eye Confrontation and Quantity of Gaze: from the Comparison of the First and Second Language

Rinako WAKAOKA¹ and Munechika ITO²

(¹Kibogaoka Medical and Support Center for Children, ²Faculty of Education, Gifu Univ)

Key Words: gear of eye-to-eye confrontation, second language, distraction

目的

本研究では, 自己注目の観点から, 認知的負荷をかけることによって視線に対する恐怖心を減少させることを目的とした実験を行った。なお, 日本人が英語課題を行う際には情報処理のために多くの注意資源が必要となるとされている (河野・林・毛利, 2016) ことから, 認知的負荷課題として英語でのインタビュー, 比較課題として日本語でのインタビューを行うこととした。同時に, 注意資源の測定のために数唱課題を行い, その得点と視線量との関係についても検討した。

方法

実験参加者: 24 名 (男性 13 名, 女性 11 名) を有効分析対象とした。

使用尺度: ①対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1997) の下位尺度である「目が気になる悩み」。②主観的幸福感尺度 (伊藤・相良・池田・川浦, 2003) の中の 5 項目をダミー項目として用いた。③印象評定尺度 (磯・木村・桜木・大坊, 2004)。

実験機材: アイマークレコーダ EMR-8B (ナックイメージテクノロジー製)

視線量の算出: 実験参加者の視線が実験協力者の目の周辺部 (4.5cm×12.5cm: 54cm²) に停留している時間 (秒) の会話時間全体に対する比率を求め, これを視線量とした。

手続: 視線恐怖に関する質問紙 (主観的幸福感のダミー項目を含む) に回答を求め, 後日, 個別で実験室実験を行った。アイマークレコーダを装着後, 実験協力者が英語 (日本語) のインタビュー項目に基づいてインタビューを行い, 2 分休憩後, 日本語 (英語) のインタビュー項目に基づいてインタビューを行った。その後, 実験協力者に対する印象評定尺度の質問紙に回答を求めた。質問紙への回答を終えたところで, 数唱課題を行った。その後ディブリーフィングを行い, 実験を終了した。

結果

視線恐怖傾向得点 (0 点～30 点) の最大得点の半分である 15 点をカットオフ値とし, 視線恐怖傾向群, 非視線恐怖傾向群に分けたところ, 視線恐怖傾向群は 8 名で, 英語条件における視線量の平均値は $M = 17.15$ (比率: 10%), 日本語条件における視線量の平均値は $M = 11.57$ (比率: 6%) であった。非視線恐怖傾向群は 16 名で, 英語条件における視線量の平均値は $M = 25.68$ (比率: 20%), 日本語条件における視線量の平均値は $M = 15.47$ (比率: 8%) であった。言語の条件が視線恐怖傾向を有する者の視線量に及ぼす影響を検討するため, 視線恐怖傾向の有無 (有 vs. 無) と言語条件 (英語 vs. 日本語) を独立変数とし, 各言語条件における視線量を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果, 交互作用が有意であった ($F(1, 22) = 7.70, p < .05, \eta^2 = .02$) ため, 単純主効果の検定を行なった。英語条件における視線恐怖傾向の有無の主効果は有意であった ($F(1, 22) = 4.65, p < .05, \eta^2 = .17$)。非視線恐怖傾向者における言語条件の主効果は有意であり ($F(1, 15)$

$= 74.07, p < .001, \eta^2 = .30$), 視線恐怖傾向者における言語条件の主効果も有意であった ($F(1, 15) = 169.39, p < .001, \eta^2 = .10$)。

英語の視線量と日本語の視線量の差を算出したものを増加量とした。視線恐怖傾向得点及び数唱課題得点と視線量及び増加量の関係について検証するために相関係数を算出した。その結果, 視線恐怖傾向得点については, 英語の視線量とは有意な傾向のある負の相関を示し ($r = -.38, p < .10$), 増加量とは有意な負の相関を示した ($r = -.52, p < .01$)。また, 数唱課題得点は増加量と有意な相関を示した ($r = -.41, p < .05$)。また, 増加量を目的変数とした重回帰分析を行なった結果, 視線恐怖傾向得点 ($\beta = -.46, p < .05$) において有意な標準偏回帰係数がみられ, 数唱課題得点 ($\beta = -.35, p < .10$) において有意傾向のある標準偏回帰係数がみられた。決定係数は $R^2 = .39$ であり, 有意であった ($F(2, 21) = 6.77, p < .01$)。

考察

Figure 1 各群における視線量平均値。

実験の結果, 英語条件において, 視線恐怖傾向のある者の相手への視線量は日本語条件より増加することが示された。同時に, 視線恐怖の有無にかかわらず, 日本語を使用しているときの視線量と比較して, 英語を使用しているときの視線量が増加していることが示された。また, 有意傾向ではあるものの, 数唱課題得点が増加量に負の影響を及ぼしていること, そして, 両者の間に有意な負の相関がみられることから, 注意資源の低さが, 英語使用時と日本語使用時の視線量の差に影響を及ぼしていることが示唆された。以上のことから, 注意資源の絶対量の少ない者は, 認知的負荷を与えることによって, 自己注目に割かれる注意資源が減少し, 視線恐怖傾向のある者であっても, その恐怖心が低下し, 通常時より相手の目を見ることができるようになることが示唆された。

引用文献

堀井 俊章・小川 捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, 20, 55-65. 他